

月城(別名=新月城, 半月城, 在城)(大韓民国指定史跡, 世界遺産)

(韓国慶尚北道慶州市仁旺洞)

月城(げつじょう、ハングル: 월성〈ウォルソン〉)は、韓国の慶尚北道慶州市仁旺洞(ハングル: 인왕동)に位置した新羅時代の王宮となる王城である^[6]。南川(朝鮮語版)(ナムチョン)北岸に沿って屈曲した月城は、三日月状の地形から、新月城(ハングル: 신월성〈シンウォルソン、シヌウォルソン〉)とも称され、後世の朝鮮時代には半月城(ハングル: 반월성〈パンウォルソン、パヌウォルソン、パノルソン〉)と称されるようになった。王の住む城として「在城」の呼称も見られる。

築城年代は『三国史記』に婆娑尼師今 22 年(101 年)とあるが、発掘調査によれば 4 世紀中頃に着工され、5 世紀初頭に完成したとされる。1963 年 1 月 21 日、大韓民国指定史跡第 16 号に指定^[11]。2000 年 11 月、国際連合教育科学文化機関(ユネスコ、UNESCO)の世界遺産(文化遺産)に登録された慶州歴史地域(慶州歴史遺跡地区、ハングル: 경주역사유적지구)の一部となる。

歴史

『三国史記』によれば、新羅には最初、赫居世居西干 21 年(紀元前 37 年)に王都(宮城〈都城〉)である金城(キムソン)が構築され、赫居世王 26 年(紀元前 32 年)春正月には金城内に宮殿が造営された。次いで婆娑尼師今 22 年(101 年)、金城の東南に月城あるいは在城といわれた城が築造されたという。このため当初の王宮については「金城」の記述が挙げられ、その後も見られるものの、金城はあくまで王京(王都)の呼称と考えられることから所在が明確でないのに対して、「月城」は王宮(正宮)として確かなものとされる。

月城の築城される場所には当初、瓠公(ここう〈ホゴン〉)の家宅があったが、新羅第 4 代の王(尼師今)となる脱解(だっかい〈ターレ、タレ〉、在位 57-80 年)が吐含山より見下ろして良地として選び、詭計により奪取した後、王位に就くとそこに住んだという。そして婆娑王 22 年(101 年)春 2 月に城を築いて月城と名づけ、秋 7 月、王が移居したとされる。しかし、この年代には異論が見られる。

『三国史記』には、訖解尼師今 41 年(350 年)春 3 月、鸛(こうのとり)が月城の隅に巢を作ったとある。その後、慈悲麻立干 18 年(475 年)春正月より明活城(朝鮮語版)(ミョンファルソン〈明活山城、ミョンファルサンソン〉)に一時(13 年間)移行するものの、炤知麻立干 9 年(487 年)秋 7 月に月城を修葺(修繕)して、翌 10 年(488 年)春正月に王が移り住んだとされ、月城は、この時代に王宮の機能を明確にしたとも考えられる。2021 年には発掘調査の結果により、月城は 4 世紀中頃に着工され、5 世紀初頭に完工したことが確認された。

「月城」の表記は『三国史記』の孝成王 3 年(739 年)秋 9 月が最後となるものの、滅亡に至る 935 年まで、新羅の王宮としての機能を果たしたといわれる。また、在城の銘のある瓦も数多く発見されている。

月城の最初の調査は、東京帝国大学の関野貞による 1902 年の第 1 回朝鮮古蹟調査のうち、8 月に慶州でなされた 3 日間余りの短期調査の一環として開始される。次いで 1910 年の韓国併合後、鳥居龍蔵により、1914 年(西南端の門跡)および 1917 年(城壁中央の基底部)に発掘調査がそれぞれ数日間行われた。1922 年には、藤田亮策・梅原末治・小泉頭夫による調査が、鳥居の発掘を踏まえて実施されている。

地理

半月の形をなす月城の東・西・北の三方は、低い丘（峰）の連なる自然を利用した土塁の稜線沿いに築かれ、南は南川（朝鮮語版）の崖の地形をそのまま利用した。月城の規模は、東西約 900 メートル（890m、860m）、南北約 260 メートル（250m）、面積はおよそ 20 万平方メートル（6 万坪余り）で、周長は川に面した南側を含めておよそ 2400 メートル（2340m（1841m）とされる。

およそ 5 世紀後半-6 世紀前半には月城の北・東部の地域が一部編入され、城域が拡大したものと見られる。西北に鶏林が位置する月城の北側には、新羅第 27 代善徳女王（ぜんとくじょおう〈ソンドクヨワン〉、在位 632-647 年）の時代に築かれたという瞻星台（せんせいだい〈チョムソンデ〉）があり、東北側には、第 30 代文武王（ぶんぶおう〈ムンムワン〉、在位 661-681 年）の時代に築造された月池（雁鴨池）と東宮（臨海殿、月池宮）が位置する。それらが造成された 7 世紀中頃から後半には、東宮と月池および現在の国立慶州博物館の地域まで拡張されていた。

遺構

南川を自然の堀とした月城の南側には城壁はほとんどないが、低い丘につながる東・西・北側には土石などによる城壁が築かれており、敷幅約 40 メートル、高さ 10 メートル余り（10-20m^[39]）であったと推定される城壁は、やや高い土塁により囲まれる。現在に見られる城壁の最高所は、東南側の国立慶州博物館に面した箇所では高さ 10-18 メートルとなる。地域の全体的な地形は西側より東側のほうが高くなるが、城内は平らであり、柔らかい地盤は補強されて、月城の城内は城外より 7 メートルほど高くなる。

はっきりとした城内宮殿の遺構は確認されていないが、『三国遺事』にある朝元殿・崇礼殿・瑞蘭殿・平議殿・内黄殿・同礼殿といった殿宇のうち、賀礼を受け、国使に引見した朝元殿や崇礼殿は月城内にあったものと推測される。また楼閣としては、鼓楼・月上楼・鳴鶴楼・望恩楼などがあり、このうち鼓楼は『三国史記』に、武烈王 2 年（655 年）、月城の中に建立されたとあり、同じく聖徳王 35 年（736 年）には、狗（いぬ）が王城（在城〈月城〉）の鼓楼に登って 3 日間吠えたと記される。憲康王 6 年（880 年）には、王が側近の重臣と月上楼に登り、民家が連なる王都を見渡したことが記されることから、これも月城内にあったものと考えられる。

門跡としては 9 か所が認められる。東の門のうち月池（雁鴨池）に至る東北の門の遺構が 1979-1980 年に発掘調査され、6.7 メートル四方の基壇上に各面 4.7 メートル（正面 1 間・側面 2 間）の単層瓦屋が存在したことが確認された。また、宮城の門と伝えられる南門・北門・帰正門・臨海門・仁化門・玄德門・武平門・遵礼門などの名称のうち、月城の門と捉えられるものとして、『三国史記』に、真徳女王 6 年（652 年）、王宮の南門が壊れたことが記され、神文王 3 年（682 年）には王宮の北門が見られるほか、『三国遺事』に、宮城の西、啟正門（帰正門）とあるのが挙げられる。

堀（垓字、ハングル: 해자〈ヘジャ〉）については、1984 年より試掘調査が開始され、発見された 6 つの堀のうち、1 つを水堀として復元し、2 つを空堀として整備していた。その後、2015 年より残る 3 つの堀が発掘調査され、「丙午年」木簡（法興王 13 年〈526 年〉ないし真平王 8 年〈586 年〉と推定）のほか国際交易を示す土偶（ソグド人のかたどる）や各種の木製遺物、それに植物の種子や動物の骨を含む多様な史料が発見された。そして堀は、初期の三国時代（4-7 世紀）には防衛を目的とした堅穴垓子であったが、統一新羅時代（8 世紀以降）になると防衛的機能は薄れて景観を加味した石築垓子の水堀に変化したものと推測された。2018 年より 5 つの堀（1-5 号垓字）を水堀として復元する保全事業が開始され、2019 年 3 月に着工し、2022 年 3 月 31 日に竣工。翌 4 月 15 日より一般公開となる。整備された堀は延長 550 メートル、最大幅 40 メートルで、探訪路・景観照明・循環式給水施設が備えられた。

ウェキペディアによる

